

文語の詩的機能と伝達機能

服部文昭

この小論では、身近な小さな例を通して、伝達を宗とする文語の研究の広がりを確認してみたい。

次に引く三つの文例を比較してみよう。

- (a) , который поострил сердце мужеством
 (b) , который поострил сердце свое мужеством
 (c) , который поострил сердца своего мужеством

この三例を見ると、最もニュートラルな表現は(a)であることがすぐにわかる。その次は、сердце свое という語順から、(b)が単なる伝達機能の他に、ある機能を果たしていることがわかる。さらに、(c)は現代ロシア語の例文としては特殊な構文であることに気がつく。

これらの文例は、実はいずれも、『イーゴリ軍記』第6句の現代語訳である。¹⁾(a)の例は、Л.А. Дмитриев, Д.С. Лихачев, О.В. Творогов の共訳、(b)は Д.С. Лихачев の個人訳、(c)は О.В. Творогов の個人訳である。²⁾ あらためてこれらを『イーゴリ軍記』の訳として考える前に、原文を下に引こう。³⁾

Почнемъ же, братие, повѣсть сию отъ стараго Владимирѣ до нынѣшняго Игоря, иже истягну умъ крѣпостию своею и поостри сердца своего мужествомъ, наплънивсѣ ратнаго духа, наведе своя храбрыя плъкы на землю Половѣцкую за землю Рускую.

このうち、下線部分が問題の箇所である。すなわち、動詞 поостри (3, sg., Aor.) の目的語であるはずの сердца の格と、その機能が問題となる。小さな可能性まで考えれば、次に挙げるような解釈の可能性がある。

	オリジナル		写本		整理・出版
	ロシア起源	外来起源	ロシア起源	外来起源	
部分生格	○	○	○	○	○
活動体対格	(○)	(○)	○	○	○
慣用表現	○	○	○	○	○

＊ すべての時期において、何らかの理由による書き換え、さらに、単なる誤記、誤写もありうる。

誤記、誤写はともかく、書き換えや慣用表現に関しては明快な根拠が見られない。それでは、他の二者のうちの一つに決定できるのかと言え、そうとも言えない。実は、この部分は冒頭から難解な『イーゴリ軍記』にあってはそれほど注目されていない箇所である。第6句では、動詞 истягну の方がむしろ注目を集めている。сердца に関して T. Lehr-Spławiński と W. Witkowski は A. Obrębska-Jabłońska のテキストに依ったリーダー

で、ここを部分生格と注解している。⁴⁾『イーゴリ軍記』の辞書では、ここでの格形を、単数・生格と記している。⁵⁾このような記述に従って、この箇所を部分生格と断じてよいものであろうか。決してそう簡単には断定できないのである。それは、次に示すような解釈の揺れによっても明らかである。⁶⁾

Первые издатели: "поошрив сердце свое мужеством"

Перевод в бумагах: "разжигаем мужеством сердца"

Екатерины II

Вс. Ф. Миллер: "изострил его/=ум/мужеством своего сердца"

А.А. Потемкин: "мужество его сердца изощряет его ум, делает его намерение непоколебимым"

А.С. Орлов: "и поострил (его)/=ум/мужеством своего сердца"

冒頭第1句での **повѣстий** を部分生格と考えているポチュブニャーがこのような解釈を示しているところからも、この箇所に未解決な問題の含まれていることが知られよう。

сердца の格形とその機能が何であるかは暫く措くとして、この箇所がある問題点を含んでいるという前提に立って、この小論の最初に掲げた三つの文例にもどってみよう。(a)は機械的な伝達の機能の他には何も伝えない。(b)は、先にも述べたようにその語順によって(a)よりも伝達される情報は多いが、それとて、古文の現代訳であるというニュアンスを伝える程度である。これらに比べて(c)は、現代ロシア語としては、特殊な例である。**сердце** を活動体として扱うことは、**лицо** などの例と比較しても無理があろう。また、部分生格として扱うことも、**стрезать хлеба, налить молока, положить соли** などの例と同列に扱ってよいものか疑問が残る。しかし、いずれにせよここでは、特殊であることに意味があると考えられる。O.В. Творогов 自身は、原文のこの箇所を部分生格と考えており、⁷⁾それをこの訳に反映させているのであろうが、そのような意図を超えて、ここでは特殊な構文であることが重要である。なぜなら、機械的・自動的に現われるはずの格形が現われず、非日常的な形式が登場することによって、この部分で伝達される情報量は単なる機械的なそれに比べて増大するからである。すなわち、読者は、個人差はもちろんあるが、この部分で特に思考することを要求され、それによってここでの原文に何か未解決な問題のあることを悟るのである。

言語の最も重要な機能である伝達の機能を支える記号としての言語の機械的・自動的な読み取りを多少とも拒むことによって、ここでは、伝達を破壊せず、逆に伝えられる情報の総量を増加させたことになる。これは、機械的・自動的な手段を拒否し特殊性を求めていくことは言語の詩的機能に特有の手段とされているが、根本的には、伝達の機能を表す手段としても共有されるもので、有効に作用する場合もある一例といえよう。

詩的機能はその存在と伝達の機能に次ぐ重要性とを一般的に認められている。なぜなら、絶対的な地位を占める伝達機能を除く諸機能の中で、詩的機能には固有の表現手段がある程度知られているからである。しかし、重ねて述べるが、伝達機能が他の全ての機能を支える基盤であることは論を俟たない。従って、詩的機能の研究のためには伝達の機能を無視してはならず、むしろ、同時に平行して研究されなければならない。このことは、失敗とは断定されぬまでも、周辺の評価しか受けられないロシア・フォルマリズムと、文語（それも、伝達機能を始めとする多様な機能を十分に担えるような確立された文語）の探求を重要視したプラーグ学派の詩学との比較によっても明らかであるし、また、実際の作品が伝達を主たる目的とする自然言語（それも文語）で構成

されているものが圧倒的であるという現実によっても明らかである。

B・ハブラーネックらの言及を引くまでもなく、詩的言語の基盤は文語にある。このことは、ロシア・フォルマリズムにおいてもプラグ学派においても伝達手段としての言語記号体系の機械的・自動的な受け取りを拒否し特殊性を求める、という主張それ自身が一般的・規範的な言語形式としての文語の存在を前提としている（あるいは、少なくともその確立を求めることを前提としている）ことによっても確かめられる。

このように、詩的機能と伝達機能はただ単に積み重ねられているのではなく、深い結び付きを示している。従って、言語の伝達の機能を、すなわち、伝達を中心とする文語の体系を明らかにできれば、詩的機能を担う詩的言語の体系も同時に解明できると言えよう。詩的機能を表現するための「特殊性」を示す手段も、その頻度や、どれほど決定的な役割を担うかは別として、手段それ自身は伝達の機能を表す場合にも用いられうる共通のものであるのだから。また、他の機能のための手段であれ何であれ、全てを貪欲に取り入れて常にそれらを活性化して用いているのが詩的言語であるが、伝達の機能を宗とする文語も、その内には多くの機能を含み、総合力をもって必ず伝達力を高めようとしているのであるから。

《注》

- 1) 句分けは便宜的にヤーコブソンに依る。
Jakobson, R. Selected Writings IV. The Hague, 1966.
- 2) それぞれ次による（エリョーミンも(c)と同様の現代語訳）。
 - (a) Слово о полку Игореве: Большая серия "Библиотеки поэта", Л., 1967².
 - (b) Слово о полку Игореве: Школьная б-ка. М., 1980.
 - (c) Слово о полку Игореве: Памятники литературы древней Руси XII век. М., 1980.
- 3) 注2)(c)より引用。
- 4) Wybór tekstów do historii języka rosyjskiego. Warszawa, 1981.
- 5) Словарь-справочник "Слова о полку Игореве": Вып. 1-5, М.-Л., Л., 1965-1978.
- 6) 辞書第4分冊より引用。
- 7) 注2)(a)の巻末注。

* * *

言語には複数の機能が存在し、それらの中で最も本質的なものは伝達の機能とされている。しかし、伝達の機能の他に、どのような機能がどれほど、さらに、どのような相互関係のもとに存在しているのかは十分に解明されておらず、また、伝達の機能に何をどれだけ含めるかについて必ずしも明快ではないが、今後の研究の進展によって明らかにされよう。